

科目名	企業経営事例研究			ナンバリング	BUS151	授業形態	講義
対象学年	3年	開講時期	前期	科目分類	選択	単位数	2単位
代表教員	土谷幸久	担当教員					

授業の概要	<p>いわき市・福島県に拠点を置く企業の経営事例について学ぶ。大企業の多くは、新産業都市指定によりいわき市が誕生する時期に前後していわき市に進出してきたものである。一方、当地には常磐炭田時代から、多くの中小企業が蔭生していた。その幾つかは進出企業の下請となり、別の企業はニッチを見つけ成長していった。また、県内にも優良企業や特徴的企業が多いことも福島県の特徴の1つである。</p> <p>この授業では、特徴的な幾つかの企業の経営事例を紹介し、規模の大小に関らずどの企業も一経営者も従業員も一努力を重ね今日があるということを理解し、地域社会、市民社会の一員として各社があるということを理解することを目標とする。</p>
到達目標	<p>製造業や販売業、あるいはサービス業など大分類をする場合、あるいは個々の企業に対して、その内実を知らずに好悪の感情を持つ人もいる。しかし、授業でこれ等を取り上げる目的は、客観的に企業経営を見つめるためである。受講者は、地域の一員として各企業が存在し、如何なる恩恵を地域にもたらしているのか、地域の発展のためにはどのように協調できるのか、さらに進路決定の一助として利用できるようにする。</p>
学習のアドバイス (勉強方法、履修に必要な 予備知識など)	<p>事前にプリントを配る場合は、予習をしておくことが望まれる場合なので、予習すること。そうでない場合も、復習は必ず行うこと。新聞、雑誌等の経済記事は毎日、毎週読むこと。各企業について、多くの学生は知らなくて当然である。しかし、学生時代に知っておくべき企業ばかりを紹介する。よって、復習は重要となる。</p>
ディプロマポリシーとの 関連	【教養学部 地域教養学科のディプロマポリシー】
	1. 専攻分野それぞれの基礎的な知識を確実に身につけ、それらを活用して基本的な問題を解決することができる。
	2. 専攻分野それぞれの基本的スキルを、地域社会に貢献するために活用することができる。
	○ 3. 自分の意見や考えを説明し、他者と協調して積極的にコミュニケーションをとることができる。
	○ 4. 広い視野と論理的・批判的思考力を身につけ、困難な課題や予測不能な事態に直面しても適切に対処することができる。
	○ 5. 社会の一員としての自覚を持ち、社会生活の場において、地域を支える社会人・職業人としてふさわしい関心・意欲・態度を示すことができる。

標準的な到達レベル(合格ライン)の目安	理想的な到達レベルの目安
各企業の沿革や現在の事業内容を把握できる。	興味を持った企業、授業で触れた企業の属する業界について、教員に聞きながらも調べることができること。

評価方法	成績評価観点						評価割合
	知識・理解	思考・判断	関心・意欲	態度	技能・表現	その他	
定期試験(中間・期末試験)		○	○	○			30%
小テスト・授業内レポート	○		○				10%
宿題・授業外レポート							
授業態度・授業への参加			○	○			20%
ノート	○	○		○			40%

課題、評価のフィードバック	<p>授業態度で特に求めたいことは、質問し議論に参加することである。質問者、理解者、教師の3者関係で授業進行を図りたい。定期試験は自筆のノートと授業中配付するプリントのみ持ち込み可。ノートさえとっていれば極めて簡単な問題一題のみの試験。その後、ノートを提出してもらい、双方を採点する。ノートは成績を付けた後返却する。</p>
---------------	--

	回次	テーマ	授業内容	備考
授業計画	第1回	ガイダンス	何故いわき市に大企業や工場が進出したのかを歴史的に理解する。	「産業政策の中のいわき」を読んで参加すること。
	第2回	利益の分かれ道	県内には15を超える植物工場がある。しかし、利益が出ているのは10件に満たない。その理由を考察する。漁業でも震災を機に攻めに転じ成功した企業もある。成功事例には共通項がある。これを学ぶ。	植物工場についてはネット等で調べておくこと。
	第3回	新規事業	ある電子部品の中小企業が経営革新をして、一躍世界の注目を集めた。その企業の軌跡を追い、経営者、従業員の苦闘を考える。	
	第4回	老舗の意地	福島市のある老舗が経営危機に陥る。経営者一家の危機も重なり、倒産の淵に立たされた。しかし、そこから見事に這い上がり、県内業界一の地位を築くまでの物語を学ぶ。	
	第5回	アパレル企業	ハニーズモデルと呼ばれる生産・販売方式を学ぶ。タイムアフタータイムなどと比較する。	同社のHpを見ておくこと。
	第6回	土壌改良・環境処理企業	クレハ環境は、勿来の町を作ったともいわれるクレハのグループ企業である。同社の強みについて考察する。	同社のHpを見ておくこと。
	第7回	自動車積載電子機器メーカー	アルパインは東京といわきに本社を置く、日本を代表する企業である。同社の製品と経営、そして強みを考察する。	同社のHpを見ておくこと。
	第8回	障害者雇用	ピープルは住民主体のまちづくりを進める団体である。震災の際もボランティアセンターの運営なども行ってきた。NPO活動を知るために、同団体を取り上げる。	
	第9回	雇用を守る	常磐興産は炭礦から16番目に分社した企業である。炭礦が分社したのは雇用を守るためであった。また同社の当地に対する経済効果について考える。	同社のHpを見ておくこと。
	第10回	本業転換	シオヤ産業は漁具の販売から始まった会社である。同様な会社はいわきには多数あった。その内、小名浜製作所等数社が他分野に転進し生き延びた。その1つである。	同社のHpを見ておくこと。
	第11回	新技術	アルテクロスや齋栄織物、フミンは福島を代表する未来技術を有する企業である。前二社は織物だが、新素材と伝統織物の違いがあり、三番目は塗装というユニークな企業だ。その技術の一端を学ぶ。	各社のHpを見ておくこと。
	第12回	2種類の流通	リオンドールとマルト、それに対してヨークベニマル。前者はCGCだが、後者はイトーヨーカドーグループである。これ等の戦略は必然、異なる。その違いを学ぶ。	各社のHpを見ておくこと。
	第13回	電池性能試験	東洋システムは2次電池の性能試験を行うユニークな企業である。近い将来ガソリン車がなくなっても同社の活動分野が減ることはない。その沿革と現在から将来を考察する。	同社のHpを見ておくこと。
	第14回	酒造業	近年清酒離れが進んでいる。何故、日本酒は敬遠されるようになったのかを、会津や二本松の酒造メーカーの現状から学び、生き延びる道はないのかを探る。類似業界として、味噌、醤油についても考える。	何れかのHpを見ておくこと。
	第15回	伝統和菓子の世界	かんのや、三万石、柏屋は三春が生んだ郡山の三代銘菓である。何故、これ等が生き延び、銘菓と呼ばれるようになったのかを考察する。	各社のHpを見ておくこと。
	試験	自筆のノートと授業中配付したプリントのみ持ち込み可。その他は持ち込み不可。範囲は全範囲。難易度はノートを毎回取っていた学生にとっては極めて安易なレベル。試験終了時にノート提出のこと。採点対象とする。後日、研究室まで取りに来た学生には返却する。		
授業の進め方		講義と質疑応答、議論。リフレクションペーパーでの質問は極力全て答える。進捗状況に応じて外部講師を招いて講演を行う場合もある。		
授業外学習の指示		配付資料は必ず復習すること。予習に関しても、提示された課題は必ず次回までに行わなければならない。 (授業外学習時間： 毎週 90 分)		

教科書	プリントを使用する。
参考書	その都度適宜指示する。
参考URLなど	各社Hp。
その他	